

～津田梅子の生き方（10）～梅子2度目の留学ープリンマーカレッジー

プリンマーカレッジへの留学を決めた梅子でしたが、横浜を発つ際には、まだ自身の専攻科目について決めていませんでした。梅子が2度目の留学を果たした当時、アメリカではネオ・ラマルキズム(生物の進化に際して、生物自身に自分を変える性質があることを認める立場。例えば、キリンの首が長いのは、高い枝にある木の葉を食べようとして自ら首を伸ばすことで次第に首が長く強くなり、その形質が代を追う毎に遺伝していき、長い年月をかけて今の姿になったと考える。なお、この考え方は現在では否定されている)が反響を呼んでおり、プリンマーカレッジにはネオ・ラマルキズムを研究する著名な学者もいました。幼い時から詩を愛し、文学書に親しんでいた梅子でしたが、一方で、理科の科目でも抜群の成績を納めていました。理知的で推理力・判断力に富み、真理を探究する熱意に燃えていた梅子は、時流や学習環境も考慮した上で、プリンマーカレッジでの学びを生物学に定めたのです。あるいはこの決断には、梅子の父・仙が農学を学んでいたことも関係していたかもしれません。

こうして2度目の留学で生物学を学び始めた梅子は、1891(明治24)年の夏には、プリンマーカレッジの数名の学生とともに、マサチューセッツ州にあるウッズホール海洋生物学研究所の夏期コースに参加しています。このコースで梅子は、最先端の生物学の研究を男女共学の環境で行うことになりました。今では当たり前である「女性が自然科学を学ぶこと」「女性が男性と共に学ぶこと」が、アメリカにおいてようやくスタートを切った時期でもありました。梅子は日本で過ごした時間との大きな違いを改めて感じたことでしょう。また、梅子は、この夏期コースでプリンマーカレッジに着任したモーガン博士と出会います。モーガン博士は、梅子が没した4年後にノーベル生理学・医学賞を受賞するほどの偉大な科学者でした。梅子はこのモーガン博士の下でカエルの卵に関する研究を行うと、後にその成果は博士との共著論文としてイギリスの学術雑誌に掲載されます。これは自然科学分野では日本人女性初の快挙となりました。そうした傑出した人物の下で研鑽を積むことができた梅子は、大きな成長を遂げるとともに、自らへの自信を深めることができたのです。

また、梅子は生涯の友と呼ぶべきアナ・ハーツホンと出会っています。2人が出会ったのは、梅子がプリンマーカレッジに入学した年のことでした。2人はドイツ語初級のクラスを受け持つ教授の部屋で開かれたお茶会の席で顔を合わせます。この時、梅子は24歳、アナ・ハーツホンは30歳でした。アナ・ハーツホンは、ヘンリー・ハーツホンの一人娘で、1860(安政7)年1月にフィラデルフィアで生まれました。ペンシルバニア美術学校で絵画を学び、22歳の歳に卒業、その後フレンド女学校等で数年間ギリシャ語や絵画等を教えていました。また、2人の間には、梅子の父・仙が1867(慶応3)年に渡米した際に、ヘンリー・ハーツホン著の医学書を持ち帰っていた縁もありました(ちなみにその本は日本で翻訳出版され、好評を博していました)。



プリンマーカレッジ時代の梅子
(キャップ・アンド・ガウン)

【提供】津田塾大学津田梅子資料室



プリンマーカレッジ本館

【提供】津田塾大学津田梅子資料室

梅子が横浜を発つた7月から2ヶ月ほど遅れて、アリス・ベーコンもアメリカに帰ってきました。アリスは華族女学校で教える傍ら、暇をみては日本各地を旅行し、日本の風俗・習慣に関心を深めていたのです。アメリカへ帰ってからはハンプトン師範学校で引き続き教師を続けながら、在日中の見聞をまとめる形で『日本の女性』と題する書物を書き始めました。この書物の執筆の計画は日本を発つ前からあったものだったため、そのつもりで資料も集めていたのですが、いよいよ書き始めてみると疑問点が続出し、アリスは梅子の助けを借りることになります。1890(明治23)年、留学中の梅子が夏休みになると、アリスは梅子をハンプトンの自宅に招きました。2人は日本の女性のことを日々話題にしながら語り暮らしました。『日本の女性』は翌1891(明治24)年にボストンで出版され、日本女性に関する優れた読み物として高い評価を受けます。この仕事の成果と反響は、梅子にとって、日本の女性のあり方を考える大きな契機となりました。

1892(明治25)年、梅子はプリンマーカレッジへの留学を終えて日本に帰国します。2度目の留学では生物学の研究に心血を注ぎ、教育・教授法等その他多くのことを学んだ梅子でしたが、学ばば学ぶほど、自身の成長を感じれば感じるほど、日本における女性の地位の低さを思い知り、心を痛めることになりました。日本では明治維新後、男子の教育は目覚ましい発展を遂げているのに、女子教育の遅れは顕著であること、特に女子の高等教育機関といえば未だに東京の女子高等師範学校の一校しか存在しないという貧弱さであることを考えると、アメリカのように、高度な女子教育をいずれ時代が希求するのではないかと、むしろ今すぐにでも、その役割を担える者を探しているのではないかと、この想いをさらに進めた時、梅子は、自分の生涯の事業は日本の女子高等教育にあるのではないかと考えるに至ったのでした。

参考文献: 高橋裕子『津田梅子ー女子教育を拓く』 岩波ジュニア新書 2022年 230頁

山崎孝子『津田梅子』 吉川弘文館 日本歴史学会編集 1988年 336頁